



翻作を通して古典を楽しむ『伊勢物語』第六段「芥川」を読む

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田山地, 範幸 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000131

翻作を通して古典を楽しむ

『伊勢物語』第六段「芥川」を読む

田山地 範幸

キーワード 伊勢物語 芥川 翻作 空白

1 はじめに

文学作品を読む際に読者は、作品の文章を手がかりにし、自分の知識や経験などに関係付けながら、作品のイメージ世界を構築する。しかしそれだけではない。読者は文章に明示されていない空白部分についても想像を働かせて、場面の情景や登場人物の心情などを補い、作品のイメージ世界を構築する。

そのことについて『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説国語編』(文部科学省、2019)は、「読み手は、明示されていない空白部分を自分の知識や経験などに関係付けながら補い、(中略)自らの作品世界を構築する」(p128)と説明している。

本稿で報告する実践は、『伊勢物語』第6段「芥川」の「空白部分」を補って表現することを通して、読者である生徒が自らの世界を構築する学習活動を行った単元の実践である。

作品の空白部分を補って理解するための手立てとして、本実践では、首藤久義が提唱する翻作法を採用した。

翻作法には、原文をかえない「なぞる翻作」と、原文をかえる「かえる翻作」がある。この「かえる翻作」には、「古文の作品をもとに現代語による作品を作る翻作」、「視点をかえて書きかえる翻作」、「ふくらませる翻作」(首藤、2023:98-113)などがある。本単元で採用した翻作はこの「かえる翻作」の3種類である。

2 学習活動の実際

(1) 単元の概要

【単元名】古典で翻作を楽しむー『伊勢物語』「芥川」で

【実施時期】2022年2月

【対象】高校2年32名(男子8名、女子24名)

①単元の流れ(全9時間)

〈第1次〉全文の口語訳と文法を確認する。その後、空白部分のアンケート用紙を配布し、回答を集計する。(第1時)

〈第2次〉空白部分の内容を話し合い、空白部分を補った現代語訳を作る。(第2～7時)

〈第3次〉僕あるいは私の視点からの翻作作品を作る。(第8～9時)

②空白部分のアンケート

第一次で使用した空白部分のアンケート用紙は次のようなものである。

「次の文章内の(1)～(25)のうち、内容的に空白があると思われるところの数字を○で囲んでください。(複数回答可)」と指示をして、その回答を提出させた。

昔、男ありけり。(1)女のえ得まじかりけるを、(2)年を経てよばひわたりけるを、(3)からうじて盗み出でて、(4)いと暗きに来けり。(5)芥川といふ河を率て行きければ、(6)草の上に置きたりける露を、(7)「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。(8)行く先多く、(9)夜も更けにければ、(10)鬼ある所とも知らで、(11)神さへいといみじう鳴り、(12)雨もいたう降りければ、(13)あばらなる蔵に、(14)女をば奥に押し入れて、(15)男、弓・胡櫛を負ひて戸口にをり。(16)はや夜も明けなむと思ひつつみたりけるに、(17)鬼、はや一口に食ひてけり。(18)「あなや。」と言ひけれど、(19)神鳴るさわぎに、(20)え聞かざりけり。(21)やうやう夜も明けゆくに、(22)見れば、(23)率て来し女もなし。(24)足ずりをして泣けども、(25)かひなし。(『新訂国語総合・古典編』第一学習社、2021:22-23)

アンケートを集計した結果、どの生徒も空白の存在を認めなかったのは20番だけであった。比較的多くの生徒が空白があるとしたのは、8番(22名)、2・3・5・21番(15名以上)、1・13・17番(10名以上)であった。それ以外は9名以下であった。

3 空白部分を補って翻作した生徒作品の例とその考察

(1)「業平」と「高子」を登場させた翻作

第2次で生徒は、「男」と「女」の代わりに「業平」と「高子」を登場させ、時代状況や人間関係を補充した作品を作った。なお、生徒作品に登場する業平と高子は、歴史上の在原業平と藤原高子そのものではなく、物語に登場する架空の人物としての「業平」と「高子」である。

次に紹介するのは、作品の前半(男が女を連れ出すまでの部分)の生徒作品である。

業平がいつものように散歩していると、手に入れることができそうにないほど高貴で美しい高子が舞を踊っている姿が見えた。業平は高子の住んでいるもとに人目を避けて土堀の崩れから通り、何年にもわたって求婚し続けていた。高子は皇后になる予定であったため、兄弟たちは2人が会わないように家来に守らせていた。高子はどれだけ業平が高子に会いたいか分かり、同意して、業平は高子をやつのことで連れ出して、業平が高子をおんぶしてとても暗い夜に逃げた。

この生徒作品には、次のような内容を補充した。

それは、次の2つの内容である。

1) 業平がいつものように散歩していると、手に入れることができそうにないほど高貴で美しい高子が舞を踊っている姿が見えた。

2) 高子は皇后になる予定であったため、兄弟たちは二人が会わないように家来に守らせていた。高子はどれだけ業平が会いたいか分かり、同意して

それだけでなく生徒は、原作に明示されている部分も、時代状況や人間関係を想像した上でより豊かな表現に書きかえている。それは、

1) 業平は高子の住んでいるもとに人目を避けて土堀の崩れから通り、何年にもわたって求婚し続けていた。

2) 業平は高子をやつのことで連れ出して、業平が高子をおんぶしてとても暗い夜に逃げ

た。
などの表現である。

この学習活動をする過程で生徒は、「高子五節舞舞姫となり」、「高子清和天皇女御となる」（鈴木、1993:198-203）などの当時の時代状況を調べ、『伊勢物語』第5段から「男は東の五条の築地の崩れよりかよう。兄たちは、毎夜女をまもる」（鈴木、1993、注1）というような知識を得ていた。その知識がこれらの理解と表現に活用されたと考えられる。

ここで生徒が行った翻作は、「古文の作品をもとに現代語による作品を作る翻作」と「ふくらませる翻作」である。

（2）「僕」あるいは「私」の視点からの翻作

第3次では、「男」を「僕」にかえたり、「女」を「私」にかえたりして翻作作品を作った。そこで行われた翻作は、「視点をかえて書きかえる翻作」である。

書きかえる際に生徒は、参考資料で得た知識を活用して、時代状況や人間関係を補充して「ふくらませる翻作」をあわせて行った。

①「男」を「僕」にかえて翻作

次に紹介するのは、「僕」の視点から翻作した作品の一部（「芥川」の前半部分）である。

僕は彼女と和歌を贈り合う仲になり、ついに垣根から忍び込んで、思いを交わす仲になった。しかし、彼女は天皇家に嫁ぐことを約束されていて、なかなか手に入れることができない女性である。そのうち、警備が厳しくなり、簡単には忍び込めなくなった。会えないことを思うと悲しくて、僕は決死の覚悟でひじきもの和歌を贈り、駆け落ちを彼女に持ちかけた。それに応えて彼女は、数日間、黒っぽく目立たない着物を着て僕を待っていた。彼女の部屋に入ると、香りのよい匂いが香っていた。僕が「行くか」と言うとすぐに、彼女は立ち上がり、部屋を一緒に出た。僕はやっとのことで盗み出して、彼女を馬に乗せて、逃げた。とても暗い夜であった。

この生徒作品は、男が、女と心を通わせ、盗み出すところまでの場面の翻作作品である。ここには、次の特筆すべき3つの特徴が見られる。

1) 情景描写と心情表現

この生徒作品には、情景描写に心情表現が込められている部分がある。それは次の部分である。彼女は、数日間、黒っぽく目立たない着物を着て僕を待っていた。彼女の部屋に入ると、香りのよい匂いが香っていた。

この情景描写には、「彼女」の2つの心遣い、つまり、闇夜に紛れやすい服装を選ぶという心遣いと、いつものようにお香を焚いて、駆け落ちの計画に気づかれないようにするという心遣いと2つの心情表現が込められている。生徒がこの情景描写を通して登場人物の心情を表現したという点を高く評価したい。

2) 会話と心情表現

この生徒作品には、会話を挿入することによって登場人物の心情をより鮮明に表現したところがある。それは次の部分である。

僕が「行くか」と言うとすぐに、彼女は立ち上がり、部屋を一緒に出た。

「行くか」という会話が挿入されたことによって、登場人物の心情がありありと感じられる。それが、より深い作品理解につながったと考えられる。

3) 体験を通して読みを深める

この生徒作品には「彼女を馬に乗せて、逃げた。」という部分がある。この表現が生まれるまでには、次のいきさつがあった。初めは男が女をおんぶして芥川まで逃げたという想像とする生徒もいたが、それに対して、「男が女をおんぶして、芥川まで移動ができるはずがない」という疑問が別の生徒から出された。そこで生徒たちはその可能性について、実験をしてみるようになった。その実験とは実際に友達を背負い、1キロほどの距離を実際に歩いてみることであった。その結果分かったことは、背負う側も背負われている側もヘトヘトになって動けなくなるということであった。生徒たちは、それに加えて都から芥川までの距離を推定する作業も行った。その結果推定された距離は、1キロの30倍ほどの距離であった。それらの検証活動を総合した結果、男が女を背負って逃げることは不可能であろうという結論に至った。「彼女を馬に乗せて、逃げた。」という表現が生まれるまでにはそういういきさつがあった。翻作作品を作るという目的があったので、生徒がここまでの検証活動をする必要感を持ったと考えられる。

②「女」を「私」にかえて翻作

次に紹介するのは、「私」の視点から翻作した作品の一部(川に到着してからの部分)である。

13日の月が南にさしかかる頃、川に着いた。星がたくさん光る夜だった。彼は何度も後ろを振り返り、息づかいも荒かった。川のほとりの草花が月に照らされ、美しい光景だった。この光景を彼に見てもらいたい一心で私は彼に「あれは何でしょうね」と尋ねたが、彼は来た方向を振り返るばかりで、私に答える余裕がないようだった。

この作品は、2人で逃げていく場面の翻作作品である。ここには、次の特筆すべき2つの特徴が見られる。

1) 時空の補充

この生徒作品の冒頭には「13日の月が南にさしかかる頃、川に着いた。星がたくさん光る夜だった。」とある。これは原文の「いと暗きに来けり。」という部分を補って、日時や空間のイメージをより鮮明に表現したものである。翻作活動の過程で作品世界のイメージがより豊かに構築された一例として受け止めたい。

2) 登場人物の心情に肉薄

この生徒作品の2行目「彼は何度も後ろを振り返り」から末尾までの表現には、作中の「私」と「彼」の心情の機微が見事に表現されている。特に、私が彼に「あれは何でしょうね」と尋ねて、美しい光景への注目を誘ったのに対して、彼はそれどころではなく、追っ手への警戒に心を奪われているという心理的な対比が見事に描かれている。

3) 男側の見方と女側の見方との違いが鮮明になった翻作

翻作活動の結果、「男」を「僕」にかえた翻作作品と「女」を「私」にかえた翻作作品との両方が生まれた。その一部を紹介する。

(a)「男」を「僕」にかえて翻作

次の生徒作品は、「僕」の視点から翻作した作品の一部(「芥川」の後半部分)である。

蔵に彼女を入れた頃、雨がひどくなり、その上、雷までもなり、彼女は、ますますおびえてしまったのです。私は「大丈夫だよ」と声をかけ続けました。怖がる彼女を稲妻が届かない蔵の奥の方に入ってもらいました。私は蔵の戸口で、弓とやなぎひをもち、番をしました。

(b) 「女」を「私」にかえて翻作

次の生徒作品は、「私」の視点から翻作した作品の一部(「芥川」の後半部分)である。

少し馬を走らせると、見たことのない蔵がありました。彼はそこで私を休ませようと決めたようです。彼から「ここで休もう」と言われ、馬から下りて蔵の中に入りました。雷雨が激しくなり、怖がる私を気遣い、「大丈夫だよ。私はここにいる。私が守る」とずっと声をかけ続けてくれました。彼は、外の世界に不慣れな私を気遣い、蔵の奥にむりやり入れました。彼は、入口で立ったり座ったりして、ずっと暗闇を見つめていました。私は彼と話がしたくて、入口近くまで行きましたが、彼は追っ手ばかりを気にしているようでした。

これら2つの作品は同じ場面を異なる視点から描いたものである。

この作品には、男は怖がる女を稲妻が届かない蔵の奥の方に入れ、何としてでも女を守ろうという男の気遣いに対して、女は男のそばにいたいのに、その女の気持ちが男に伝わっていないことを表している。このように、男側の見方と女側の見方との違いが鮮明になった翻作作品である。特に、「女」を「私」にかえての翻作作品の方は女の気持ちをより細やかに表現したと考えられる。

視点が異なる翻作作品を作り合い、読み合うことによって、登場人物双方の立場からの見方や感じ方がより明らかになったと考えられる。

4 まとめ

本単元で採用した3種類の翻作活動で、文章に明示されていない空白部分だけでなく、明示されている部分についても想像を働かせて、場面の情景や登場人物の心情などを補い、作品のイメージ世界を構築することができるということが、少なくともこのクラスにおいては確認することができた。

本単元ではさらに、『伊勢物語』第5段に関わる時代状況や人間関係などの知識を収集したり、実際に人を背負って歩いてみて作品内容の確認をしたりした。その上で、作品上の登場人物の「業平」や「高子」を登場させる物語に翻作する学習活動を行った。その活動が、情景をより詳しくイメージし、登場人物の人物像や心情を生き生きと表現することに役立ち、場面の状況や登場人物の状況をよりイメージするために役立ったと考えられる。

今回の翻作活動では、原作の時代状況を調べたり、実際に逃避行の有様について体験的に試して確認したりしたが、それが、作品のイメージ世界を創造的に再現するうえで役立ったと考えられる。

ちなみに、授業後のアンケートによると「わかりやすい」、「内容が深まった」と回答した生徒が、88%になった。授業後の生徒の感想には、「人の生き方を考える上で今も通じ、明日の生きる力がもらえる」「高子の方が業平よりも芯の強さを感じる」「根拠を考え、ワクワク、ドキド

キシながら、発言した。自分の案に賛成を得られた時の喜びは、今までの授業にはなかった」などの言葉があった。

注

1 在原業平と二条の後(高子)の物語は、「三・四・五・六・二十六・二十九・六十五・七十六・百・百六段に及んで(鈴木、2013:16)」いることを踏まえて、生徒が三・四・五・六段の内容を諸情報として翻作作品の参考とした。

参考文献

文部科学省(2019)『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説国語編』東洋館出版
首藤久義(2023)「翻作のすすめ」『国語を楽しくープロジェクト・翻作・同時異学習のすすめ』東洋館出版社
鈴木宏子(1993)「伊勢物語年表」『竹取物語伊勢物語必携特装版』學燈社
鈴木日出男(2013)『伊勢物語評解』筑摩書房

本論文の作成にあたり、終始適切な助言を賜り、また丁寧に指導して下さった首藤久義先生に深く感謝いたします。

(たやまのりゆき／多治見西高等学校)